

【研究論文】

保育者養成における幼児音楽の学びについて

—幼稚園実習における音楽の活動に着目して—

平尾 憲嗣* 滝沢 ほだか*

要 旨

短期大学における保育者養成では、2年間の学修で保育現場に対応できる音楽表現の力を育成する必要がある。2年次後期開講の「幼児音楽Ⅱ」では、授業の目的を「音楽活動を通して演奏技能を高めるだけでなく、保育の現場で活用できる音楽表現の力を育成することを目的とする。また、保育実践において子どもの音楽活動を支援するために必要な知識や技能も、同時に習得する。」と定め、子どもの姿を意識しながら音楽を伴った保育活動の展開に関連させて講義を行なっている。しかし、普段の授業からそれを具体的に意識し続けることは困難といえる。そこで本研究では、幼稚園実習での活動から学生が得た学びと、実習後の意識の変容について、質問紙調査から明らかにすることを目的とする。それを基に授業における学生の学びについて検証を試み、授業改善について検討を行った。

キーワード：幼児音楽、弾き歌い、幼稚園実習

I. はじめに

平成20年3月に、文部科学省による学校教育法施行規則の改正により幼稚園教育要領が改定された。そこで定められている5領域における「表現」のねらい、内容、及び留意事項を踏まえた保育活動を展開するための知識や技能の習得を目指すため、本学では、「基礎音楽Ⅰ」「基礎音楽Ⅱ」を1年次に、「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」を2年次に開講している。1年次で開講する「基礎音楽Ⅰ」「基礎音楽Ⅱ」では、段階的な学びを踏まえ、授業の目的と到達目標を下記の表1の通りに、「幼児音楽Ⅰ」「幼児音楽Ⅱ」では、基礎音楽での学びを踏まえ、下記の表2のとおり設定している。1年次での学生の到達目標設定理由については、①は2年次の夏季に実施される就職試験に向けたピアノ演奏技術の向上、②は①で得た技術を基に、ピアノでの音楽的なイメージもった表現の向上、③では幼児音楽の和声的構成の把握や、弾き歌いにおける歌唱への意識を高めるための技術の獲得、④ではレパートリーの拡大により保育現場での多様な音楽を子どもたちと共有するための知識、技能、表現の習得、をねらいとして設定している。さらに2年次の到達目標においては、

①では様々な季節、行事、日常の習慣などに基づいた幼児曲を多く暗譜により習得し、保育現場におけるより多くの場面での音楽を伴った豊かな表現により、子どもの表出を引き出す役割として必要な技術を習得し、②では、歌唱技術、表現力、演奏技術の向上はもとより、演奏中における子どもへの意識を向けることをねらいとし定めている。また、総合的な2年間での学びでは、技術、知識、表現力の習得にとどまらず、実際の保育現場に繋がる音楽活用の実践力を伸ばし、音や音楽の楽しさを子どもに伝える力を獲得すること、子どもの主体的な遊びを支援する力を習得することで、感性豊かな保育者の育成を目指している。

表1 基礎音楽における授業の目的と到達目標

	授業の目的	学生の到達目標
基礎音楽Ⅰ・Ⅱ	子どもの音楽活動を援助できる力を育成するため、 ①豊かな感性と音楽の基礎的技術を身につける、 ②自身の創造力や表現力を養い、音楽の実践力を獲得することを目的とする。 授業では、MLシステムを活用した集団授業と個人指導を行い、弾き歌いや基礎的な鍵盤技術の奏法などを習得する。	①バイエル教則本の楽譜について説明することができ、バイエル100番まで演奏することができる。 ②バイエル終了者は、練習曲以外のピアノ曲を暗譜で演奏することができる。 ③簡易伴奏法のためのコードネーム(ハ長調)について、見譜で演奏することができる。 ④幼児曲(子どものうた村Aレベル)について、暗譜で弾き歌いを行うことができる。

* 岡崎女子短期大学

表2 幼児音楽における授業の目的と到達目標

	授業の目的	学生の到達目標
幼児音楽Ⅰ	基礎音楽での学修をふまえ、様々な音楽活動を通して、音楽の表現力および演奏技能を高めることを目的とする。また、保育実践において子どもの音楽表現活動を支援するために必要な知識や技能も、同時に習得する。	①春、夏、秋、冬の季節を中心とした幼児曲20曲以上を暗譜で弾き歌いすることができる。 ②簡単なコードを使って幼児曲に伴奏をつけることができる。
幼児音楽Ⅱ	幼児音楽Ⅰでの学修をふまえ、音楽活動を通して演奏技能を高めるだけでなく、保育の現場で活用できる音楽表現力を育成することを目的とする。また、保育実践において子どもの音楽表現活動を支援するために必要な知識や技能も、同時に習得する。	①保育の現場で展開できる、様々な音楽技術力と音楽表現力を獲得することができる。 ②秋、冬の季節その他の幼児曲10曲以上を暗譜で弾き歌いすることができる。 ③簡単なコードを使って幼児曲に伴奏をつけることができる。

入学から卒業までの音楽の授業の流れは図1、授業内で扱う内容は表3に示す。授業では、MLシステムを活用した集団授業と個人レッスンを行い、集団授業では、先生役、子ども役等を設定した幼児曲の歌唱や弾き歌い、コード奏等を行っている。また、個人レッスンでは、個々の演奏技術のレベルを把握したうえで、弾き歌いや基礎的な鍵盤楽器の奏法等の指導を行い、音楽のイメージ力、表現力を高めることについては、基本的な演奏技術がある程度身についた段階で、個人指導を行っている。

その一方で、実際の子どもたちの様子を想定した音楽を伴った保育活動については、それぞれの場面のイメージを少ない経験から想像することでしか意識することができず、授業の目的に向けた学修の在り方については、教員が幼児曲の弾き歌いや、コード奏などの内容を扱う授業時に学生にその意識を持つ必要性を説いているが、その意識づけの難しさについて課題となっていた。現実的には、2年次後期に実施される幼稚園実習による学修により、補われている部分があり、子どもたちとの関わり合いの中で、授業で学んだ知識や技術をどのように工夫し活動の中に取り入れて保育を行うか、思考力、適応力、応用力を養う貴重な場となっている。また、幼稚園実習を終えた学生の音楽の授業の様子からも、子どもへの意識が著しく高まっている様子を、学生たちの言動や弾き歌いの姿勢などから感じることができる。卒業時までの2年間の学修の中で、学生が学びを深めるためには、達成目標を明確に示し、適切な学修方法を伝える必要がある。そのためには、弾き歌いや手遊びなどの音楽活動における学生の意識を、幼稚園実習以前の段階から子どもとの音楽活動を念頭において行えるよう、新たな指導法を模索しなければならない。

以上の現状を踏まえ、本研究では、学生が幼稚園実習での音楽活動からどのような学びを得て、今後の学修についてどのような意識が芽生えたかを明らかにすることを目的とする。さらに、それらを基に2年間という短い期間での「基礎音楽」「幼児音楽」における学生の学びのあり方について検証を試み、

授業改善について検討を行う。

また、平成28年6月に文部科学省幼児教育部会での幼児教育部会取りまとめにおいて、現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しについて検討され、近年の子供の育ちを巡る環境の変化等を踏まえた教育内容の見直しについて、1)「身近な自然や生活の中にある、何気ない音や形、色に気付き楽しむことが、幼児の豊かな感性や自分なりの表現を培う上で大切であることから、自然や生活の中にある音や素材に触れる機会の充実を図るようにする。」等の文言が、幼稚園教育要領等の構成の見直しにおいて付加される可能性が示された(文部科学省2016)。このことから、5領域の関連性を深く把握し、自然や生活の何気ない音や形を遊びとして表現するための感性や音楽の知識や技術、表現等の更に高いレベルでの習得が必要であり、更に、音楽の分野に留まらず様々な領域との関連性を把握した上で、子どもの能動的な音を伴った表出を促すことのできる豊かな力量を備えた保育者を養成していく必要性が今後求められると推測され、そのための指導方法についても併せて検討する必要がある。

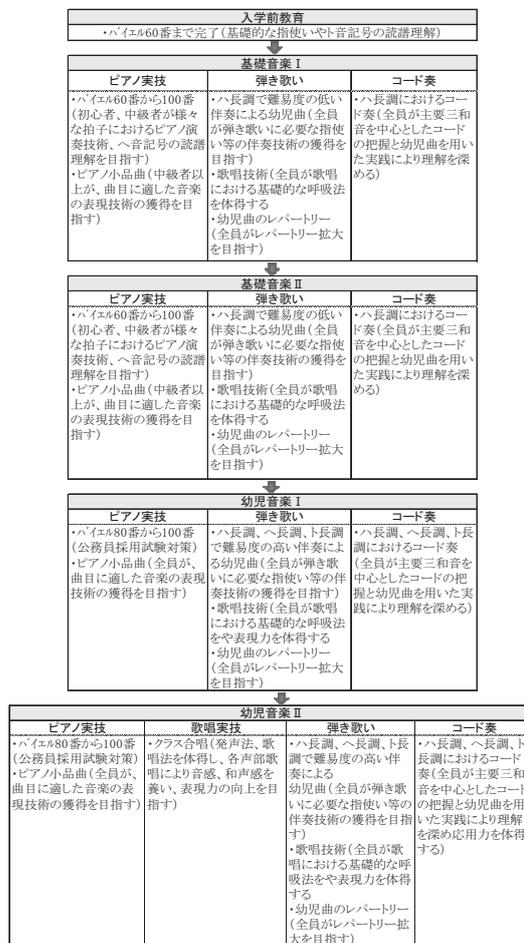


図1 入学から卒業までの音楽に関する授業の流れ

表3 幼児音楽、基礎音楽の授業内容

		中間試験曲	期末試験曲
1 年次	基礎 音楽 I	ピアノ試験(暗譜) ・バイエル3曲(当日1曲指定) ・ピアノ2曲(当日1曲指定)	ピアノ試験(暗譜) ・バイエル3曲(当日1曲指定) ・ピアノ2曲(当日1曲指定) 幼児曲(見譜/下記8曲中1曲指定) ・このぼり・せんせいとおともたち ・ちょうちょう・どんぐりころころ ・ぶんぶんぶん・かたつむり ・あさのうた・きんぎょのひろね
	基礎 音楽 II	ピアノ試験(暗譜) ・バイエル2曲(当日1曲指定) ・ピアノ1曲 幼児曲(暗譜/下記6曲中1曲指定) ・たなばたさま・大きなくりの木の下で ・とんぼのめがね・まつぼっくり ・こぎつね・おかえりのうた	ピアノ試験(暗譜) ・バイエル2曲(当日1曲指定) ・ピアノ1曲 幼児曲(暗譜/下記6曲中1曲指定) ・ジングルベル・たきび ・ぞうさん・おべんとう ・さよならのうた・手をたたきましょう コード奏試験(見譜) ・ハ・ヘ長調(青本カワソツトーン等から)
2 年次	幼児 音楽 I	幼児曲(暗譜/下記8曲中2曲指定) ・かわいいうぐれんぼ・ことりのうた ・ぼかまかてくてく・とけいのうた ・めだかの学校・はなび ・しゃぼん玉・自由曲1曲	幼児曲(暗譜/下記8曲中2曲指定) ・オバクなんてないさ・つき ・山の音楽家・あめふりくまのこ ・もりのくまさん・おもちゃのチャチャチャ ・南の島のハメハメハ大王・自由曲 コード奏試験(見譜) ・ハ・ヘト三長調 (青本カワソツトーン等から)
	幼児 音楽 II	幼児曲(暗譜/下記8曲中2曲指定) ・やぎさんゆうびん・きのこ ・アイアイ・いぬのおまわりさん ・おはら・しゃぼん玉 ・自由曲2曲	幼児曲(暗譜/下記8曲中2曲指定) ・ゆき・あわてんぼうのサンタクロース ・お正月・さよならぼくちのほいくえん ・一年生になったら・うれしいひなまつり ・自由曲2曲 コード奏試験(初見視奏) ・ハ・ヘト三長調から

II. 調査概要

1) 調査方法

2016年9月～10月にかけて行われた幼稚園実習後の短期大学2年生を対象に、幼稚園実習での音楽との関わりについてを問う質問紙調査を行った。質問項目については、実習中における音楽を伴った活動の具体例や、実習を経験して実感した音楽の必要性等の内容について、以下の8項目を設定し、回答を求めた。

- ①実習中に音楽に関わる保育をしましたか
- ②子どもたちはたくさん歌を知っていると思いましたが
- ③子どもたちが歌を歌っている時はどのような場面が多かったですか
- ④幼稚園での音楽活動について具体的に記入してください(曲名を記入)
- ⑤英語を使って歌ったり遊んだりしていましたか
- ⑥幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか(a. 幼児曲、b. 楽器遊び、c. 手遊び、d. 弾き歌い、e. ピアノ演奏、f. その他、を設定し必要と思われる優先順位とその理由をコメントとして記入)
- ⑦幼稚園での子どもの生活の中に、音や音楽はどのように使われていましたか(具体的な場面を書いてください)
- ⑧音楽に関する実習の反省と今後の展望

2) 調査対象

幼稚園実習後の短期大学2年生 182名

3) 分析方法

調査方法で記した質問項目から、⑥幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか(a. 幼児曲、b. 楽器遊び、c. 手遊び、d. 弾き歌い、e. ピアノ演奏、f. その他、を設定し必要と思われる優先順位を記入)、⑦幼稚園での子どもの生活の中に、音や音楽はどのように使われていましたか、⑧音楽に関する実習の反省と今後の展望、の3つの回答の内容に着目し、保育現場における音楽を伴った保育活動の実践において、幼稚園実習で得ることのできた、保育者として必要とされる音楽の活動における技術、表現等の今後の学修に必要とされる具体的な内容について、現時点での学生の習得状況から、幼稚園実習を通じた保育現場でどのように応用できているのかや、そこで学生が抱える問題点等を把握し、それを基に、学生が卒業後、現場で即戦力となって活躍できる技術や知識等の効率良く学びが得られるよう授業を充実させるため、入学から卒業までに学修する年次や学修内容の検討を行うための分析を行う。

⑥幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか(a. 幼児曲、b. 楽器遊び、c. 手遊び、d. 弾き歌い、e. ピアノ演奏、f. その他、を設定し必要と思われる優先順位を記入)、については、6つの内容のうち、優先順位の高い上位2位までの結果に着目し、幼稚園実習を経てどの音楽活動について必要性を実感したかについて明らかにする。

⑦幼稚園での子どもの生活の中に、音や音楽はどのように使われていましたか(具体的な場面を書いてください)、については、授業で行った音楽の学修が、保育現場のどのような場面において活用できる可能性があるかを探り、更に子どもの主体性を活かした音楽のあり方について検証するため、自由記述から回答数が多い順に抜き出し、それぞれの場面における音や音楽の使われ方について明らかにする。

⑧音楽に関する実習の反省と今後の展望については、音楽を伴った保育活動において、自由記述の回答を内容ごとに分類し、総合的に学生が必要と感じた今後の学びのあり方について、具体的な内容を明らかにする。

Ⅲ. 結果と考察

1) 項目⑥「幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか」について

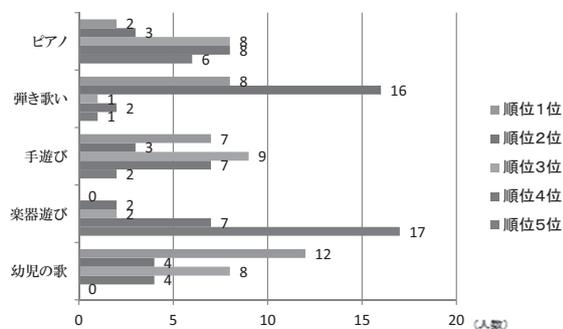


図2 項目⑥「幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか」の人数

「幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか」については、図2の通りの結果であった。今後の学修については、優先順位1位として、レパートリー拡大を選んだ人が63名と一番多く、次点の弾き歌いを1位として選んだ人は55名という結果であった。具体的な理由としては、「沢山知っていると活動に取り入れることができる」、「歌を知っていないと子どもと一緒に歌えないから」、「たくさん子どもたちに教えてあげたいから」、「歌を沢山知って子ども達の感性を豊かにしたいから」、「季節の歌などを歌うから」、「先生が沢山知っていると子どもも沢山知ることができるから」等の回答が多かった。これらのコメントからは、実習を通して、保育現場での子どもとの関わりの中で必要性を肌で感じたことが言葉になったことが伺える。レパートリーを拡大するためには、曲を暗譜するの必要があり、特に音楽経験の短い学生にとっては、読譜力や楽譜をみて鍵盤を弾く技術不足の問題を抱えていることは否めない。学生のうちにさまざまな季節、生活、動物などに因んだ幼児曲を通して楽譜に慣れるの必要があり、そのために多くの時間確保が必要とされることが推測されるが、授業や課題を通して少しでも多くのレパートリーを確保するためのきっかけを与えていく必要があると感じた。一方で、音楽経験の長い学生は、楽譜を見てすぐに演奏できてしまう傾向があるため、なるべく多くの曲を暗譜し、楽譜から目を離して演奏できる技術も併せて習得していく必要があることを説いていくことが重要であると感じた。

また、幼児曲や手遊びにおける曲の難易度は、基

本的にはそれほど高くは無く、幼児が理解しやすい音楽として、リズム、和声、メロディ等が明快に作曲されている曲がほとんどであるため、音楽経験の短い学生にとってはコード奏などを適度に用いる事で効率よくレパートリーにすることができると考えられる。

次に優先順位1位として選んだ学生が多かった項目は、弾き歌いであった。コメントとして、「ピアノを間違えると歌が止まってしまうため」、「ピアノを弾くことで必死になってしまうから歌もしっかり歌いたい」、「自分が最も苦手で多くの場面で使うから」、「保育者が弾いて手本を見せないといけないから」、「日課の中で歌う曲が沢山あったから」、「子どもたちと楽しく歌いたいから」等の意見があった。弾き歌いを優先順位2位として選んだ学生は61名ののぼり、1位のとして選んだ人数をさらに上回ったことから、非常に多くの学生が弾き歌いの必要性を感じていることが確認できた。

弾き歌いでは、ピアノの伴奏と歌唱を同時に行うため、ピアノについてはある程度鍵盤を見ずに弾くことのできる技術、更に歌の意図とする表現を歌唱によって相手に伝える表現力という、2つの基本的な力が必要とされる。幼稚園実習においては、これら2つの力に加え、子どもの様子を見ながら臨機応変に音楽を展開する応用力が必要とされるため、基本的な力を身につけていない場合、歌唱や伴奏が途中で途切れてしまったり、自分の演奏に集中するあまり、子どもの歌唱とスピードがずれてしまったり等の問題を抱えてしまう。この項目での回答数の多さから、学生が実習で弾き歌いをする多くの機会を得て、実際の子どもの前にした弾き歌いにおいて、子どもの歌を引き出す難しさについて実感したことが窺えた。弾き歌いにおいては、あくまでピアノは伴奏であり、歌唱が音楽の主導となる必要があるため、伴奏との音量のバランスも考慮しながら、歌唱や音楽の雰囲気により子どもの表現力を引き出すことのできる弾き歌いの実践を目標に据える必要がある。学びの段階としては、まず、弾き歌いにおける基本的な演奏技術を習得した後、歌唱による豊かな表現を支える想像力や表現力を習得する必要がある。音楽の拍子、テンポ、リズム等を介して、どのような情景や様子を描こうとしているか、歌詞の意味やその歌詞にどのようなリズムやメロディが付けられているか等を分析し、音楽的な特徴を深く理解し、その曲によって子どもにどのような気持ちを感じてもらいたいかを把握することが重要である。更に、そのために必要とされる発声や歌唱表現

を身につけ、子どもの様子を観察できる余裕を持つことも求められる。これらが備わる事で、子どもの目線に立った表現豊かな幼児曲の弾き歌いが可能になるであろう。従って、弾き歌いには非常に多くの技術や知識、表現力が必要であるため、学生が段階的、且つ継続的に学修する必要があり、教員は学生の段階に適した助言や指導をすることができるよう、学生が学んでいるプロセスを視覚化し、自らの振り返りを行うことができる工夫が必要であると感じた。

次に優先順位 1 位の回答が多かった項目は手遊びで 39 名であった。コメントとしては、「導入にとりいれたい」、「絵本を読む前に取り入れたい」、「場面の切り替えて沢山の手遊びを用いたいから」、「子どもを落ち着かせるために必要」、「実習先であまり使わなかったから」、「空き時間に子どもが退屈にならないように」、「どこでも楽しく遊べるから」等の回答があった。この項目については、第 3 位以降の回答数が半数以上を占めていたため、今後の学びで必要とされてはいるものの、レパートリー拡大や弾き歌い技術と比較すると、やや関心が低い印象を受けた。1 年次の「基礎音楽Ⅰ」「基礎音楽Ⅱ」においては、2 年次の夏に控えている就職試験を視野に入れ、基礎的なピアノ技術の習得と幼児曲のレパートリー拡大、及び弾き歌い技術と表現力の習得に重点を置いた指導を行っているため、手遊びについては 2 年次後期での「幼児音楽Ⅱ」において扱っている状況である。屋外活動等のピアノが無い場所でも身体を動かしながら友達同士で楽しく活動できることや、導入や活動と活動のつなぎ目などでも活用できることから、レパートリーとして習得した手遊びを実際に学生の前で披露する場等を多く設けていけるよう、授業設計を更に検討していくことが必要であることが示唆された。さらに、幼稚園実習で実際に子どもの前で実践することで得る学びが大変貴重であると考えため、幼稚園実習前の「幼児音楽Ⅰ」の中で、先生役と子ども役に分かれて、実際に模擬的な手遊びによる活動を取り入れることが望ましいと考えられる。

次に多かったのはピアノ技術である。コメントとしては、「ピアノを弾き間違えると子どもが歌えないから」、「歌は子どもたちが歌えてもピアノは弾けないから」、「BGMとして使えるから」、「上手く弾くことよりも音のメロディを楽しい、きれいと感じてもらいたいから」等の回答があった。この項目については優先順位 3 位以降の回答数が手遊びの項目よりも著しく多数であったため、実習を終えた学生

にとって重要と認識されていないことが明確であった。しかし、弾き歌いについては回答数が多かった事から、大半の学生は弾き歌いの伴奏のみに必要である基礎的なピアノ技術については既に習得できていることが窺えた。また、少数派である学生については、一年次の「基礎音楽Ⅰ」「基礎音楽Ⅱ」におけるピアノの基礎的技術の復習や、幼児曲におけるコード奏を用いた伴奏の簡略化等の技術について、弾き歌いの歌唱表現に意識を向けられるレベルにまで引き上げていく必要があり、「幼児音楽Ⅱ」においても定期的な個人レッスンが必要であることが明らかとなった。

最後に 1 位の回答数が一番少なかったのは、楽器についての知識や演奏技術であった。コメントとしては「合奏する楽しさを沢山伝えてあげたいから」、「子どもは音が出るものに興味があるため」等、少数ではあるが意欲的な回答もみられた。また、「その他」のコメント欄に着目してみると、大半が実習中に楽器を用いる事が無かった等の記述が多数であったが、生活発表会での楽器の演奏指導のために学びたい等の記述もみられた。現在の基礎音楽、幼児音楽の授業では、楽器を実際に手にとって、学生自身が合奏を経験し、さらに楽器を用いた音楽活動について考える機会が現状の授業内容では時間が確保されていないため、保育内容演習「表現」で楽器に触れるだけでなく、毎年 12 月に開催している学生音楽祭の活用を促すことや、幼児音楽における授業の一部を活用し、楽器に触れる時間を確保することのできる授業設計も検討していきたい。

保育者として今後の授業でどのようなことを学びたいかについて全体の傾向を観察してみると、幼稚園実習での子どもとの関わりの中で、さまざまな場面で幼児曲の弾き歌いが行われていたことが窺え、これらによって多くの学生がレパートリーの拡大について学修意欲を高め、弾き歌いの技術向上について課題として捉えていることが明らかとなった。また、ピアノ技術や楽器の知識についてはあまり重要と考えていない傾向も明確化された。一方で、生活発表会等での楽器指導等は保育現場で必ず必要となることが推測されるため、今後は授業内で取り入れていくための検討も行っていきたい。また、特に 1 年次におけるピアノの個人レッスンの時間を更に充実させ、学生個々の技術の向上を目指すことはもとより、個々のレベルに応じた難易度の異なる幼児曲の課題を課すことにより、音楽経験の長い学生には、更に高いピアノ技術と弾き歌いにおける歌唱やその表現を意識させ、音楽経験の浅い学生については、

ピアノ演奏における正しい指使いを徹底させることや、音楽の構造を示すコードについての理解を深め、必要最低限の音楽の骨組みでの弾き歌いができるようにすることで、多くのレパートリーの拡大を促していく必要があると感じた。しかし、2年次夏に控えている就職試験では、バイエル教則本を試験課題として用いている園も多いため、その為の対策にも時間を確保しなければならない現状もある。そのため、多くの時間を費やさざるを得ないバイエル教則本での練習を、ピアノ技術向上のみのテキストと捕らえず、保育者となって必要となる音楽の表現力やイメージすることについても、明示的に学生に意識させることで、手遊びや幼児曲弾き歌いに関連付けて、表現力を養うことが必要であろう。

2) 項目⑦「幼稚園での子どもの生活の中に、音や音楽はどのように使われていましたか」について

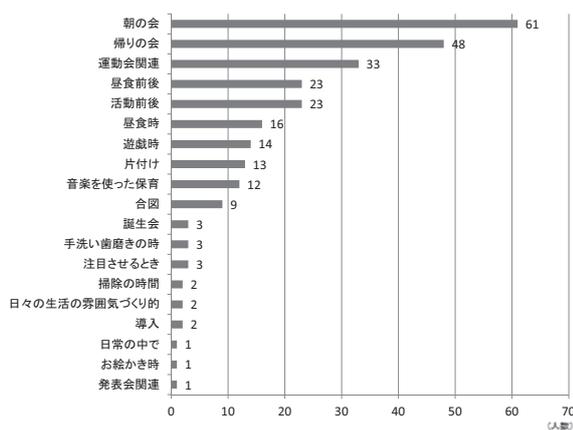


図3 項目⑦「幼稚園での子どもの生活の中に、音や音楽はどのように使われていましたか」における自由記述の分類

幼稚園での子どもの生活の中で、音や音楽はどのような場面でどのように使用されていたかの質問については、図3の結果であった。

朝の会、帰りの会で音楽の活動が多数であり、それについての自由記述に着目してみると、季節の歌や朝の歌などを毎日歌うことを習慣づけている内容が殆どであった。この活動については、皆で1つの曲を毎日継続的に歌うことで、クラスの一体感や団結力を高め、更には様々な季節から感じられる楽しさや特徴を、音楽を通して子どもたちが感じられる貴重な時間であると考えられる。

昼食前後では、自由記述の回答の内容から、配膳準備の間に保育者がピアノを弾いたり、お弁当の歌を皆で歌ったり、キリスト教の園では賛美歌のお祈りをしたりと、様々な用途で音楽が使用されている

様子を窺うことができた。

運動会関連での音楽活動については、実習の時期と運動会が重なったことで、学生がその練習や運動会で、ダンスや太鼓演奏等、幼稚園での行事における音楽の在り方について体験できる良い機会を得たことが窺えた。また、自由記述に多かった運動会での音楽に合わせての行進等は、集団生活における規律や一体感を養い、また、音に合わせて体を動かす等の活動は、感情を表出するきっかけとなったり、魚や動物の動きをまねて身体表現をする活動等は、子どもの感性や想像力を養う等、運動会の活動の中では、身体表現と音楽がリンクした様々な運動が展開され、身体の動きとリズムにより感性が養われる様子を推測することができた。

活動前後、合図、片付け、注目させる等については、音楽により子どもの注意を引くことに使用されていることが推測される。また、片付けや手洗いがいについては、音楽を用いることによって、それらの行為に楽しさを付加し、子どもの生活の中でそれらの行為が習慣づけられるよう工夫されていると想像できる。

日々の生活の雰囲気づくり、日常の中で、お絵かき時などは、音楽によって子どもの心を落ち着かせたり、興奮させたり等、さまざまな場面で活用されているという印象を受けた。

幼稚園での子どもの生活の中で、音や音楽はどのような場面でどのように使用されていたかについては、全体の結果から、多くの幼稚園におけるさまざまな場面での音楽の使われ方について、音楽によって子どもたちが能動的に動く活動が極めて少ないという印象を受けた。子どもの園での生活の中で、音が先行し、その音に合わせて子どもが何かしらの活動を行うという音楽を伴った活動は、子どもの表出を促す場合もあれば、保育者が音楽によって子どもの動きを支配する場合もある。子どもが能動的な活動を行うためには、保育者が、子どもの普通の遊びの中での動きや、言葉等を拾い、それを音を伴った遊びへと展開していく技術が必要である。そのため、幼稚園での1日の流れの中で行われる様々な活動やそれ以外の自由な遊び時間などにおいて、能動的な音遊びを引き出すための環境設定が重要であり、そのような子どもの音楽活動を支援することのできる保育者の養成が急務であるため、授業内容として対応できるよう、改善していく必要がある。

3) 項目⑧「音楽に関する実習の反省と今後の展望」について

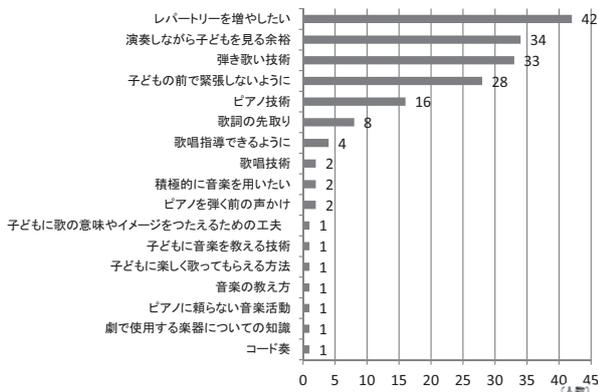


図4 項目⑧「音楽に関する実習の反省と今後の展望」における自由記述の分類

音楽に関する実習の反省と今後の展望については、図4の通りの結果であった。自由記述の内容からは、「⑥幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか」にも関連する「レパートリーを増やしたい」との回答が多く見られ、保育現場での多種多様な状況に対応できる多くの幼児曲のレパートリーを持つことの必要性を実習において学生が感じていることが明らかであった。また、幼稚園実習で扱われている幼児曲については、授業で扱っているテキスト以外から使用されていることが推測できることから、保育現場で現在良く歌われている新しい幼児曲を調べながら、必要に応じて紹介していく必要性を感じた。

2番目に回答が多かった「演奏しながら子どもを見る余裕」については、実習における音楽を伴った保育活動において、子どもへの意識が高まったことが示された結果であることが窺えた。また、演奏中に子どもの様子にも配慮し、子どもの歌唱のスピードにも対応する等、気を配らないといけない要素が多いため、授業の中で子どもへの意識付けに力を入れていきたいと感じた。この項目の回答者34名については、「⑥幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか」にも関連する「レパートリーを増やしたい」の弾き歌いの回答において、25名が第1位、2位として選択しており、学生自身が弾き歌い技術と子どもを見る余裕のことからについて、関連性を感じていることが明らかとなった。また、ピアノの技術について反省している学生が5番目に多かったことから、弾き歌いにおけるピアノ伴奏をスムーズに行うための技術が不足していると実感している学生が少なからず

いることが確認でき、ピアノの基礎的技術習得のための継続的な練習を促すための課題の内容について、就学年次や時期を考慮した到達目標について、状況を踏まえた見直しが必要であると感じた。

「歌詞の先取り」についても、弾き歌い技術と大きく関連しているため、今後の授業において鍵盤を見ずに弾いたり、マイクロティーチングを取り入れることで、先生役を定期的実践するなど、実践を意識した授業を行う必要がある。特に、歌詞の先取りは、演奏している自分以外のことに気を配れる余裕を得る必要があり、実際に何度も反復的に練習を重ね、歌詞を先に伝える感覚に慣れる必要があるため、授業内では勿論であるが、課題としても学生のレベルを考慮しながら課していく必要があることが明らかとなった。

「子どもの前で緊張しないように」について反省する学生も4番目に多く、これについては、子どもの前での演奏経験が少ないことが大きな理由として挙げられると推測できる。この項目について、「⑥幼稚園教諭になるためには今後の授業ではどのようなことを学んでいきたいですか」の質問における結果と照らし合わせてみたところ、明確な反省の理由となる結論を見つけることはできなかったが、弾き歌い技術不足や、状況に慣れていないことが理由として推測されたものもあった。

一方、少数回答に着目してみると、本来保育現場で大変活用的な知識として重宝するはずであるコード奏を学びたいとする記述が極めて少なく、「基礎音楽」と「幼児音楽」で時間を設けて説明と実践を行っているにも関わらず、学生がコード奏についてほとんど必要と感じていないことが把握できた。幼稚園実習においては、あらかじめ実習で課題として示された幼児曲を演奏したり、または授業で習得した幼児曲を演奏することが予想されるため、初めて見た楽譜を演奏するなどの緊急性を伴った弾き歌いは実施されなかったことが推測される。しかし、保育現場では、子どもがリクエストする幼児曲や、難しい伴奏の幼児曲を弾く機会が求められるため、コード奏による簡易伴奏について、2年次後期の幼児音楽Ⅱにおいても、学生に継続的に課題を課し、保育現場で応用し活用できるコード奏の習得を目指し、幼児曲に多く見られる調性であるハ長調、ヘ長調、ト長調の主要三和音によるコード理解と実践を深める必要がある。また、コードを理解することにより、音楽を形作る基本的な様式を理解することが可能であるため、今後の保育者に求められるであろう「身近な自然や生活の中にある、何気ない音や形、

色に気付き楽しむことが、幼児の豊かな感性や自分なりの表現を培う上で大切であることから、自然や生活の中にある音や素材に触れる機会の充実を図るようにする。」における自然や生活から音を拾い、音楽としての遊びをさらに発展させるうえでの、音楽的知識として、身につけることが重要であると考え。また、「子どもに歌の意味やイメージをつたえるための工夫」については、歌の意味やイメージを音楽で表現できることが前提として、造形や身体表現等の要素を用いながら、子どもの五感に上手く働きかける活動について考える必要があり、様々な領域との関連性を視野に入れた環境設定が重要である。

これらの反省や今後の展望から、実習を通して子どもに音楽を用いて楽しく表出を促すためには、どのような学びを今後学生が得ていくかを見直すきっかけになったことが確認された。「基礎音楽Ⅰ、Ⅱ」、「幼児音楽Ⅰ」におけるピアノ技術や弾き歌いを通じた表現力向上のための個々の学修から発展して得た音楽の表現力や活用力が、実際に子どもと関わりながら保育を展開する実習を通して、どのように子どもたちに伝わるかを身を以て実感できる大変貴重な経験を積んだことが明らかであった。特に少数意見においては、子どもを意識した自由記述が多く見られ、今までの授業での学びをどのように応用していくかの段階へ差し掛かっているという印象を受けた。

IV. まとめ

今回の調査により、幼稚園実習での活動から学生が得た学びが明らかとなり、同時に学生が抱える課題、授業改善についての事柄についても明確に把握することができた。2年間の大学での音楽の授業を総合的に捉えると、授業内容やその段階的な学びについて、大きな問題点は明らかとはならなかった。しかし、幼稚園実習後の音楽を伴った遊びについて、学生の中で子どもの目線に合わせるという意識が大きく芽生え、子どもの好奇心を引き出すために工夫しようと、今後の学びについて具体的な目標を立てている様子が、今回の結果から示唆された。そのため、授業においても指導や助言を的確に段階的に行っていく必要性を強く感じた。また、今後の授業における学修への意欲の向上として、レパートリー拡大と弾き歌いの向上という、2つの項目に集中する結果が明らかとなり、その一方で、コード奏についての意識は全体的に低い結果であった。弾き歌い

における歌唱への意識に重きを置くため、重要となる伴奏技術において、特にピアノ経験の浅い学生にとっては、コード奏の理解と実践による知識と技能の習得は必須であると考え。従って、「基礎音楽Ⅰ、Ⅱ」「幼児音楽Ⅰ」では、幼稚園実習前までに、必要最低限の技術を学生が習得できるよう、毎回の授業の中で継続的にコード奏の説明と実践を取り入れ、様々な幼児曲で応用できる柔軟な思考や技能が高められるよう指導を行っていくべきであると感じた。また、幼稚園実習後の「幼児音楽Ⅱ」においては、主要三和音だけでなくコードの性格や役割について学生に説明し、それを学生が理解し実践できる技術を身につけることで、コード奏による簡易伴奏の和声的色彩がより豊かになり、幼児曲の表現において、子どもに感じてもらえる音楽の楽しさ、美しさ、可愛らしさ等の魅力がより鮮明になり、それを受け取った子どもの感受性が豊かに養われることに繋がると考えるため、コード奏における総合的知識と応用力を養うための授業を展開していく重要性を強く感じた。

幼稚園教育要領では、第一章総則の中の幼稚園教育の基本として、以下の通り示されている。2)

幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

1. 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
2. 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学修であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
3. 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

今回の調査結果における、項目⑦「幼稚園での子どもの生活の中で、音や音楽はどのような場面どのように使用されていたか」についての回答に着目してみると、多くの幼稚園での様々な音楽を伴った活動は、子どもにとって受動的な活動として行われているという印象を受けた。幼稚園での集団生活において、規律や一体感を得るために皆で歌ったり、合図で音を鳴らし音により注意を引くなど、音の使われ方は工夫され、多様であり、その役割においては適切といえる。しかし、子どもにとっての音や音楽による表出や、そこから発展した遊びへと繋げていくためには、今までの慣例的に行われてきている音や音楽を使用した遊びや活動の方法を見つめなおし、子どもが能動的に音や音楽を使ってあそぶことのできる方法や環境について模索していく必要があると考える。そのためには、音や音楽を使った遊びのきっかけが音から始まるという概念から、聴覚だけでなく、人間の五感である、視覚、嗅覚、味覚、触覚等の様々な感覚から遊びのきっかけが始まり、そこから偶発的に音や音楽での遊びが生まれ、更に発展していくというプロセスに着目していくことが重要ではないだろうか。そのためには、保育者にその遊びを発展させるための技量が備わっているかがとても重要である。

これからの保育者を養成していくにあたり、普段の幼稚園での子どもの生活の中から、子どもが何気なく発した言葉、動作等に気づき、その意図を理解した上で、その事柄について保育者が拾い、更に遊びへのきっかけを促すことのできる豊かな感性を育成することが必要であると考え。幼稚園実習を終えた2年次後期の学生は、音楽の演奏技術や知識等もある程度習得しており、殆どは採用試験も終えている状況である。従って、卒業につながる「幼児音楽Ⅱ」において、従来の授業内容による指導に加え、子どもの能動的な音や音楽遊びを促すための活動について学生自身が考え、グループで実践する等の学修のための機会を継続的に設けることで、未来

の保育者を目指す学生が、幼稚園での音や音楽のあり方について深い理解を得て、新たな視点について創造する意識を持ち、子どもが夢中になることのできる遊びを随時引き出すことのできる保育者へと成長することができる。従って、我々教員は保育者育成としての一助となるための授業改善を模索し、実践していくことが必須である。

※本研究で使用したアンケートは、研究で使用する旨の了承を得て、個人名やクラスが分からないよう配慮して扱った。

付記

平尾：第Ⅰ章、第Ⅲ章(2)、(3)、第Ⅳ章
滝沢：第Ⅱ章、第Ⅲ章(1)

引用文献

- 1) 文部科学省(2016)「資料1 幼児教育部会取りまとめ(案)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/attach/1373429.htm
- 2) 文部科学省(2008)『幼稚園教育要領解説』フレール館、p23

参考文献

- ・小川宜子・妹尾美智子(2010)「感性を育むための音楽授業の取り組みについて」『岡崎女子短期大学研究紀要』第43号、pp1-5
- ・小川宜子・高御堂愛子・木許隆(2008)「学生の音学力と保育者養成—学生の音楽経験に関する調査より—」『岡崎女子短期大学研究紀要』第41号、pp23-35
- ・鈴木方子・大岩みちの(2013)「保育者をめざす学生の育ちを願って—実習における課題とねらいの指導—」『岡崎女子短期大学研究紀要』第46号、pp1-7

